

「多様化」という

ことについて

清水 教 惠

いつ頃からかは知らないが、多様化ということがよくいわれる。私たちがほとんど無意識に使用するほどに一般化し常識化しているこの多様化という概念には、実は妙なまやかし性があるように思われる。

例えば、今日の社会福祉状況を説明するとき、わが国における経済社会情勢の変化や人口高齢化の進展、国民の生活構造や意識構造の変化などによって社会福祉問題や福祉ニーズが国民各層の間に拡大し、従ってそれに対応した本目こまかい多様な社会福祉対策・福祉サービスが必要とされるに至っている、というようにいいかたをする。つまり、福祉問題・福祉ニーズや福祉サービスの多様化が指摘される訳である。同時にそこでは、社会福祉の対象が旧来の貧困窮乏層からそれ以外の国民一般層へと広がったことや、福祉対策・福祉サービスに関しても、伝統的な救済対象への経済的保障や施設収容の保護から、福祉

対象個人ないしはその家族に対する医療・看護・教育・心理・福祉などの専門的援助サービス（近年ではとくに、在宅サービス）へと移行すべきことが、しばしば強調される。

このような説明は一見自然で正当なように思われるが、私たちがここで疑問に感じ、問題とすべきことは、果たしていわゆる多様化によって伝統的社会福祉問題が解決されたのか否か、また問題が多様化の結果変質したり、相対的に減少したのかどうかということであろう。確かに今日、私たちの周囲には自動車やカラー・テレビを始め多数の耐久消費財があふれ、健康管理のために栄養のとりすぎに悩む多くの人たちが存在する。あたかもそこには、貧困問題や生活不安などないかのようである。ここでは、詳細に現代の貧困状況を検討するゆとりはないが、しかしひとたび児童福祉施設で養護される子供たちの家庭環境や生育歴などに目を向ければ、私たちはそこに彼等の親が置かれた経済・社会・文化的な貧困状況を感じない訳にはいかないし、そこから家庭崩壊や養護問題が導びかれて子供たちの福祉ニーズを形成していることも見逃せない。また、ごく普通の家庭においても、例えばそこに重症の障害者や病氣・寝た

きりの老人をかかえ込むことにでもなれば、たちまち生活の安定を失ってしまうような状況がどこにでも存在する。

このような生活不安や貧困状況を身近にもちながらあまりそれを意識せず、むしろそれを否定するような感覚はどこからもたらされるのだろうか。もちろん厳密なものではないが、私たちの多様化という認識方法にも、その一つの原因が存在するように感じられる。

つまりそれは、AがA・B・C・Dに多様化したというとき、ともすればそれが、AがB・C・Dに移行（変質）したと理解されたり、また、そこまではいなくとも、多様化によってAの比重の相対的低下が生じたと受けとめられるからであろう。実はそれは、多様化の説明がものごとの表面的・形式的変化の機械的な羅列に留まっていることに起因する。従って、多様化という概念に問題性があるというより、変化の内実（AとA・B・C・DおよびA・B・C・D相互の関係）の構造的理解や、ものごとの本質的認識を欠いた多様化論（多様化の認識のしかた）にこそ、まやかし性や問題があるというべきであろう。

（しみず きょうえ 社会学部助教授）